

5 次世代人材育成・文化・スポーツ振興特別委員会における村岡正嗣県議の質疑

2013年6月26日

◆審査事項「学習指導要領の改訂を踏まえた教育活動の充実」（思考力・判断力・表現力、伝統と文化の尊重）

Q. 村岡正嗣委員

- 1 思考力・判断力・表現力を育む教育の推進について、小学校の事例だが、学年におしなべて標準的に取り組むという発想か。
- 2 県立高校では、協調学習の手法として「知識構成型ジグソー法」を採用しているが、他にどのような手法があるのか。また、なぜジグソー法を採用したのか。

A. 義務教育指導課長

- 1 学習指導要領において、全ての学年、小中学校を通して、このような力を育むことになっている。当然、小学校低学年と中学校2年生、3年生では発達段階が異なるので、それぞれレベルはあるが、たとえ小学校1、2年生であっても、その発達段階に応じて、自分で考える、自分で判断する、自分の言葉で伝える、といったことは、しっかり育ませていくように取り組んでいる。

A. 高校教育指導課長

- 2 生徒の、受け身ではなく主体的な学びを創造する授業方法は、他にもいくつかある。例えば、ハーバード大学のマイケル・サンデル教授がやられたことで有名になった白熱教室のような討論型の授業であるとか、ディベートの手法を使った授業であるとか、様々なものがある。ジグソー法を採用したのは、それぞれの生徒が、他の2人の生徒に自分しか知らない情報を伝えなければならないという使命を帯びているので、自分が発言をして伝えないと答えが出てこないという仕掛けをすることで、自らの主体的な学びを引き出そうという技法であるためである。現在のところ、県では非常に良い手法と考え、一生

懸命取り組んでいる。

Q. 村岡委員

- 1 よく4年生の壁とか10歳の壁といった話を聞く。統計的にも表れていて、低学年では差がないが、4年生になると学力の差が出てきて、それが残っていくということである。どの学年でも思考力・判断力・表現力を付けることはとても大事で、ここに書かれた通りだと思っているが、小学校4年の壁とか10歳の壁ということについて何か考えがあるか。
- 2 ジグソー法は何年ぐらい実施する予定なのか。計画の途中で新たな手法が開発されることもあると思う。どのような長期的な計画をもっているのか。

A. 義務教育指導課長

- 1 小学校4年生の壁、あるいは10歳の壁は、県としても聞くところである。実際、県で行っている3つの達成目標でも、「読む・書く」、「計算」において、大体小学校4年生、5年生で一度数値が落ちることもある。こうした発達の段階、あるいは教科内容の特性に応じた特徴というものがあるということは十分認識している。思考力・判断力・表現力については、繰り返しになるが、そういったことを踏まえながら、その発達段階で、自分で考える、自分で判断することが大切だという認識の下に進めている。

A. 高校教育指導課長

- 2 協調学習の取組については、平成22年度から5年間の予定で取り組むこととしている。この協調学習の取組は、様々な授業方法の一つと考えているので、今後も、生徒の主体的な学びを引き出す手法について研究していきたいと考えている。